

論考：

「自由」 vs. 「愛」： 人類文化を貫く主要矛盾
— 『下流老人』に対する人々の議論を踏まえ、その根底を考える



中川 徹 (大阪学院大学 名誉教授)

TRIZ ホームページ、論考、2016年 4月 22日 (和文掲載)、(4月 29日 英文掲載)

<http://www.osaka-gu.ac.jp/php/nakagawa/TRIZ/jpapers/2016Papers/Naka-Liberty-Love-2016/Naka-Liberty-Love-160419.html>

0. はじめに

本稿は、**藤田孝典著『下流老人』(2015)を原典**にして、その論旨を「見える化」しながら考えるという仕事から生まれたものです。直接には、Amazon.co.jp サイトに掲載されている、同書に対するカスタマーレビュー（読者の書評）82 件の議論を考察したことが契機になりました。興味深いことに、多数の読者が星 5 あるいは星 4 の高い評価をしている一方、また多数の読者が星 1 や星 2 という低い評価をしています。

著者 [藤田氏] の主張は、「現在高齢者の 20%強（約 6～7 百万人）が生活保護相当の貧困下にあり、将来の日本の貧困はさらに劇的に悪化するだろう。貧困は、個人の努力にも関わらず、社会システムが引き起こしている。憲法で「健康で文化的な最低限度の生活」を保証しているように、下流老人など生活困窮者を生活保護などで保護するべきである」というものです。

これに対する **[読者の一部からの] 批判 [意見]**は、「身勝手な人生を送って貧困になったような人も、当人の責任でなく、社会のせいになっている。社会保障へのタカリを薦めており、放置すれば国が破たんする。福祉は性善説だけでなく、性悪説も考慮しないと、世間は納得しない。解決策は市場経済と民主主義を否定するもので、非リアルである。」などです。

わたしは、**同書の「見える化」**をし、多数の一般読者の書評を検討してコメントを書きました。その過程で、**議論の根底の深くに**、社会的思想、特に社会倫理に関わる重要な問題があり、それが社会の文化として十分に解明されていず、その結果社会の共通認識が得られていないことに気づきました。それは、**競争社会と助け合いに関わること**、勝ち負けと自己責任の世界における生活保障・福祉の問題です。これを突き詰めると、「自由」と「愛」という、人類文化における二つの重要な標語に到達します。

本稿は、「自由」と「愛」との間の**矛盾が、人類の文化における「主要矛盾」である**ことを述べます。それは実は、「自由」と「自由」の間の矛盾と、「愛」と「愛」との間の矛盾をも含んでいるのです。また、個人のレベルから、グループや組織のレベル、企業や国のレベルへと、社会構造の階層を上がっていくにつれてより大きな困難な問題を含みます。そして、この「自由」と「愛」との矛盾を解決していくと努力してきたのが人類の文化であったこと、それがまだ未成熟なのだということを述べます。

***** 以下が本体部分の目次ですが、内容を省略します。

1. 「自由」と「愛」： 両立するべき矛盾
2. 両立のための根底にある概念： 倫理と基本的人権
3. 「人類文化の主要矛盾」とその構造
4. 競争と「勝ち負け」
5. 性善説ベースの解決策と性悪説ベースの解決策

***** 以下に、結論部分を書きます *****

6. むすび

この論考はさらに続くのですが、本稿で述べたことを整理して、一つの区切りにします。

(1) **人類の文化は、「自由」を第一原理とし、その伸長を主要目標とします。**

各人が、自分で判断し、行動し、「生きる」ことです。

「自由」は、(自然的、社会的な)「競争」に「勝つ」ことを目指します。

一人の「自由」と他者の「自由」とは、必然的に衝突します(矛盾します)。

(2) **人類の文化は、「愛」を第二原理とし、その普遍化を主要目標とします。**

各人が、その子を愛し、家族を愛して、「助ける、守る」ことです。

「愛」は、「自由」を自制して、「自由」同士の衝突を無くすことを目指します。

「愛」は、自分の周りの「身内」を助け・守るために、「外」からの攻撃に対抗する性質があります。

それは、「身内」を一つの社会的主体と考えると、一つ上のレベルでの「自由」と「競争」を出現させます。

(3) 人類の文化は、「自由」と「愛」という、しばしば対立する(矛盾する)二つの原理を、どのように両立させ、使い分けつつ発展させていくかを、問い続けてきました。

「自由」vs.「愛」を、本稿で、「人類文化の主要矛盾」と名付けました。

(4) この「自由」と「愛」との両方を包含して動機づけ、その間の調整を行う指針として

人類文化が獲得してきたのは、「倫理」でしょう。

平たく言えば、「人の道」、「良心」です。

「倫理」の根幹部はすでにDNAに埋め込まれていると考えられますが、当たり前すぎて、明示することが難しい面があります。

「基本的人権」の概念は、この「倫理」[の一部]が明確化されたものといえます。

(5) 人類は、その文化の歴史の全体を通して、この「自由」と「愛」という「主要原理」の伸展と、「自由」vs.「愛」という「主要矛盾」の解決に取り組んできたといえます。

その中で、いろいろな**社会システムが作られ**、文化が発展してきました。

ただ、「**主要矛盾の解決**」という問題は**一層複雑化し、困難を生じている面があります**。

(6) **困難の原因の第一は**、社会システムが多数で、多層で、大規模で、相互に複雑に絡み合っていて、**各社会システムにおける、「自由」「愛」「倫理」のあり方**を明確化し、世界的に理解[を共有]することができていないことです。

原因の第二は、それらのあり方が明確にされ、(社会的な)「倫理」が明確にされても、多くの個人や社会組織が自己の利害(「自由」)を主張して、「倫理」に**反する行動をとり、それが社会的「勝者」になる**ことです。

そして、そのような行動や組織が、(小さいものから大きなものまで)世界中の至る所にあり、それらが**歴史的な積み重ね**を持っていることです。

(7) 以上のように、本稿は、**人類の文化の根底にある「主要原理」と「主要矛盾」という概念**を見出し、その骨格を描き出しました。

今後さらに、基本的ないくつかのレベルの社会システムについて、

そこでの「自由」と「愛」と「倫理」の実情と理念を考察していきたいと考えています。

それが、当初から取り上げていた、社会の貧困の問題と、福祉の考え方を明確にし、社会を改革するための指針を明確にすることにつながると考えています。

以上